

白藍塾オリジナル

2010入試小論文分析&解答のヒント

2010年3月発行

白藍塾の入試小論文分析は、他の予備校と違って、その問題に対して受験生がどのようにアプローチすればよいのかを具体的に説明している。そのため、この分析を参考にすれば、誰でも合格レベルの答案を書けるはずだ。該当の大学・学部の志望者は、ぜひ、これを読んで、自分で実際に答案を書いてみてほしい。

執筆・樋口裕一・大原理志・大場秀浩

●早稲田・スポーツ科学部

三つの課題文を読んで答える問題だ。

文章1は、今年度開催されるサッカーW杯の南アフリカ大会について、現地のライターがレポートした内容。文章2は、バブル崩壊後の企業スポーツの現状を説明した上で、スポーツと企業と地域社会の関係を再構築すべきだと述べている。文章3は、ラグビーW杯の日本大会に向けて、様々な課題を挙げている。

複数課題文のパターンは初めてなので、とまどうかもしれない。また、複数課題文の場合は、それぞれの主張が対立しているか共通しているかを判断することが原則だが、三つの文章のうち、明確な主張があるのは文章2だけなので、その点でも対応がしにくい。

そのような場合、主張がはっきりしている課題文に焦点を当てて考えると手がかりが得られることが多い。文章2は、簡単に言えば、企業の宣伝に利用されてきたスポーツビジネスが不況のあおりを受けて苦しんでいるため、これからは地域社会との連携を考えるべきだと主張している。そう考えると、文章1も、政治経済状態のために危険を伴う南アフリカのサッカーW杯について語り、文章3も、ラグビーW杯が経済的な不安をかかえていることを指摘している。つまり、三つの文章はいずれも、政治や経済状態の影響を受けてスポーツが危機に陥っている、あるいは危機に陥る恐れがあることを指摘している。

したがって、「スポーツが政治や経済の影響を受けているという状況はよいことなのか」を問題提起するのがもっとも書きやすい。

「スポーツと政治経済が結びついている状況でよい」という立場からは、「スポーツによって健全なナショナリズムを作り出したり、経済効果をもたらしたりできる。スポーツをうまく

政治や経済にいかすべきだ」「スポーツは経済的基盤があつてこそ、人々が楽しむことができる。政治経済のなかにうまく組み込むことがスポーツを広めるために不可欠だ」などの論がある。逆に、「スポーツと政治経済を強く結びつけるべきではない」という立場からは、「スポーツを経済とからめて考えると不況時に切り捨てられるなどの危険がある。スポーツの精神は政治とは独立したものなので、地域の人ボランティアなど、企業に頼りすぎないスポーツのあり方を模索すべきだ」「スポーツの精神は企業の精神とは異なる。無償の行為として自分を高めるために行うのがスポーツの本来のあり方だ。ある程度はやむをえないにしても、アマチュアリズムを尊重すべきだ」などの論が可能だ。

◎執筆者の許可なく本紙の全部もしくは一部を無断転載、無断複写することを固く禁じます。

発行・白藍塾総合情報室 (03-3369-1179)

<http://www.hakuranjuku.co.jp>